

土木に賭けた夢 新渡戸家三代が つくりあげた 十和田市

建設産業史家
菊岡 俱也

プロローグ

十和田市は東北（青森県）の美しい町である。

幕末の頃、すでに町づくりのための総合ビジョンをもち、その実現に向けて人々が一心不乱に努力してつくりあげた町だ。その多くは土木事業によって成った。

京都をモデルとしたという町は碁盤の目のようにすっきりしている。

ここは、五千円札に刷られている新渡戸稲造博士の祖父、父、兄の三代がつくりあげた町である。

三代の先頭を切ったのは南部藩士だった稲造の祖父新渡戸傳。

開拓の祖・新渡戸傳

幕末の南部藩は窮乏の底にあった。

藩士をリストラして、禄を召し上げなどしたがとても収まらない。

再建策として、今後10年の間に藩内の荒れた土地を開墾すれば、禄の代わりにその土地を与えるという政策を打ち出した。



五千円札に印刷されている新渡戸稲造。11月からは図柄が樋口一葉に交代。

その結果、新地の開墾熱が興り、63歳の藩士、新渡戸傳も同志を募って荒地「三本木原」（現・十和田市）の開拓に乗りだした。

そもそも、傳は並の武士ではなかった。

父維民は謙信流兵法を学びのち藩の上杉流兵法師範となったが、藩の武備について急進的な意見を述べたため盛岡に召されて罰せられ、川内に追放となった。

ときに傳は28歳、息子十次郎は生後間もなかった。

一家を襲ったこのような試練が、後年の開拓者としての素地をつくった。

父の災禍により武士の身分を捨てた傳は、安野屋素六と名乗って川内に店を開き、江戸に上っては小間物を仕入れ藩内では卸売りもやり、やがて十和田山の材木を江戸に送る材木商人となった。

傳は十和田の山中を歩き、あるいは地勢をみて、林道がないために材木が切り出せない所、水路がないために土地が荒野となっている所などを視察して、藩内の土地開墾の遅れを実感した。いっぼう材木商としてかなりの利益を得た。

こうして藩内をくまなく往来しているうち、傳には未開墾の三本木原が開拓に有利な土地と映った。

傳は江戸・京都・大阪・四国・中国にも足を延ばして開墾のための情報を集め、経験者の話を聞いた。

やがて、父維民の罪が許されて傳も60石の土分に取り立てられ一家の名誉は回復した。傳はのちに藩の山奉行となり「三本木新田御用懸」となった。

傳は三本木原開拓の工費を3万4,000両と見込み、これに出資をすれば「成功の暁には水田1町、年収約5石の土地を与える」と募り、24人の出資者が得



三本木原を東西に横断し、太平洋岸まで続いている稲生川。傳、十次郎、七郎の三代にわたって開墾が進められた。

られた。官の事業に民間資金を投ずる方式である。

「三本木開業之記」のこと

息子の十次郎に口述筆記させた「三本木開業之記」（十和田市立新渡戸記念館所蔵）には、三本木の地理・気候・用水の確保・物産開発・人集めの方法と都市計画が詳しく書かれている。

そのあらまは次のようである。

- ① 三本木平野は寒冷地とはいえ寒暑中和の土地で開発に力を尽くせば世界の豊饒人物繁盛の所となる。
- ② 地理は太平洋で西の連山から良材雑木がとれ川による運送も容易だ、東は広い砂浜で魚介・粕もえられる。南部馬は日本で三本木は多数の飼育が可能である、地味は痩せているが開拓すれば数十万石の米穀がとれる、用水は奥入瀬川から分水して平野に引水する。
- ③ 駄馬市を設ける、瀬戸焼を製造する、養蚕を改良する、馬鈴薯で酒味噌をつくる役所を設けて他国と交易する……など物産開発の方法を詳述する。
- ④ 国外追放の罪人は以後三本木に送るといふ藩命があり雑用を命じて労働力とする。
- ⑤ 開拓に必要な人力を得るため窮民を集めて扶助し普請物産方に配する、また百姓の2、3男や他国人を集め妊婦を保護し子供を養育する。



十和田市街地の航空写真。碁盤の目状にすっきり整備されている。新渡戸十次郎が京都の街をモデルに進めた都市計画が、戦後に実現された。

⑥ 労働者慰安のための遊女屋を設ける。

などをあげて、十二町四方の新町の計画を描いた。

傳にこのような見識とリーダーシップがあったればこそ、人々の信頼を得て出資者たちも応じ、町づくりの成功に導けたと思う。

息子から孫へ

開拓の第一歩は、奥入瀬川おいらせの水を三本木に引くことで、二つの穴堰と陸堰の掘削により導水された。その苦労は筆舌に尽くしがたいものがあつた。

しかし、荒地の乾いた三本木に豊かな水がもたらされ、その後の発展の基礎がなつた。稲生川いなおい（写真左）である。

傳を助けたのが息子の十次郎で、上水工事の完成、京都風の十二町四方の格子状の町割（写真右）、土地利用、景観への配慮は十次郎の功績といわれる。町はやがて米の収穫とともに、馬鈴薯が育成され、馬市・養蚕所が創始され、製革が始まって発展をする。

のちのことだが、三本木は軍馬の供給地として全国に鳴り響く。



十和田市立新渡戸記念館の前に立つ銅像。
右から、新渡戸傳、新渡戸十次郎、新渡戸稲造。

十次郎は父をよく補け、前述のように都市計画プランも彼の知識によるところ大であった。

十次郎は上水工事の実際に力を貸し、完成後はさらに太平洋岸まで掘りぬく第2次上水計画を実現する途中で病死した。時に慶応3年、父傳75歳、十次郎48歳であった。

傳の孫の七郎（邦之助）は、三本木開拓に関係したあと、明治の鉄道建設業界に身を投じ、猪苗代湖疎水工事・那須原疎水工事・月居トンネル工事（茨城）などに従い、建設業史上名高い「隧道南」の南一郎平が創業した名門「現業社」の経営に参加した。

七郎の弟が五千円札の稲造である。

エピソード

明治9年（1876）7月12日、奥羽巡幸の途次、明

治天皇は三本木駅に立ち寄られて小休止、三本木の開拓者新渡戸傳の遺業に対して御嘉賞を賜った。

傳はすでに5年前に79歳で世を去っていたが、遺族の七郎、稲造や新渡戸家四天王といわれた金崎環と多くの開拓民が天皇ご一行を迎えた。

後年、稲造は「人はこの世に生まれ出て来たその時から、何か人様のためにお役に立つことをするために、生まれ出て来た」と信じている」という言葉を残している。

傳・十次郎・稲造の銅像が建つ十和田市立新渡戸記念館は、町の歴史をいまに伝える文化施設である。

土地の歴史に思いを馳せての十和田市訪問をお薦めしたい。

【写真提供：十和田市立新渡戸記念館】